



## まず私たち大人が ~ 補習校で耳にした日本語(3)「過半数を超える」~

前回は担任の「予め予習を」の言葉を取り上げ、重言（重ね言葉）について考えました。

先月、アメリカ大統領選挙が行われました。どちらの候補者が540票の過半数を超え当選するのか、テレビやインターネット等で大きな関心をもって報じられました。職員室でも話題になっていました。

さて、重言を取り上げたら、この“過半数を超える”  
という言い方を取り上げないわけにはいきません。

「超える」や「越える」は、基準となる物事があって、そこに達し、さらにその先に進み入る際に用います。例えば“1時間を超える”“国境を越える”と言います。それぞれの基準は、“1時間”の明確な数値であり、“国境”という現場や地図上のはっきりした境界線です。



〈ある日の授業から〉

「540票の過半数を超える」の基準は、「540票の過半数」です。これは271票から540票までの大きな範囲であり、固定された明確な数値ではありません。それに、重言と同じように、「過」と「超える」の意味の重複があり、適切な表現とはいえません。

「過半数」を使用するなら「過半数に『達する』『過半数を『獲得する』『占める』」が適切です。「超える」を使用するなら『半数』を超える」が適切です。しかし、“過半数を超える”の言い方は実際に使用され、暗黙の内に、あたかも270票が基準のようにして通じています。

これまで3回連続で、クロイドン校舎で気になった日本語を取り上げてきました。私にとっては、日本国外で耳にする日本語だから、国内以上に気になったのだと思います。今回の“過半数を超える”も、前回までの“ミンチミンチ”（畳語）も“予め予習”（重言）も日常会話の中で使われ、また、相手に伝わるものです。なぜ伝わるかについては触れてきませんでした。言葉でのコミュニケーションが成立するかどうかは、少なくとも、語法（文法）だけで説明できるものではありません。同じ言葉でも使用する場面で異なることがあり、使用する人の世代や生活をする上での文化的な背景、また、個々人の語感などの相違もあります。「以心伝心」という心の通じ合いもあります。そもそも言葉自体が揺れるという性質をもっています。そのような点から、なぜ伝わるかについて考察することはできると思います。

しかし、伝わればよいものではありません。正しく伝わるのが重要です。当補習校の教育目標の第一に「国語をしっかり学ぼう」を挙げています。それは、国語の基礎・基本を身に付けることです。国語の基礎・基本とは、国語についての正確な知識と、正しく話したり聞いたり、書いたり読んだりする力のことです。このような知識や力を身に付けさせるために、カリキュラムに沿った授業を行っています。

一方で、国語の基礎・基本は、学校の授業だけで身に付くものではありません。日本国外にあつては、各家庭や日本人のコミュニティなどでの言語環境が、特に大切と考えます。まず私たち大人が国語に関心をもち、より適切な国語を使いたいと思います。そして、子どもたちの国語に対する興味を高めていければと思います。